

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 1日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320074

研究課題名（和文）ナイル諸語形態統語論の共時的、通時的比較研究

研究課題名（英文） Synchronic and Diachronic Studies of Nilotic Morphosyntax

研究代表者

稗田 乃 (HIEDA OSAMU)

東京外国語大学・アジアアフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：90181057

研究成果の概要（和文）：本申請による研究は、通言語学的に珍しいナイル諸語の形態統語論的現象を共時的に記述した。そのうえで、それらの現象の一部にかんして、ナイル諸語を比較研究することにより、通時的な説明をあたえた。例えば、エヴィデンシャルティを表示する形態統語論的手段を持っていることや、能格性の起源である。また、国際研究者ネットワークを構築し、研究により得られた成果を公開し、共有するためのプラットフォームをアジア・アフリカ言語文化研究所に立ち上げた。

研究成果の概要（英文）：The project 'Syntactic and Diachronic Studies of Nilotic Morphosyntax' conducted field research to make synchronic description and to develop diachronic studies about morpho-syntactic phenomena in Nilotic languages. For instance, the project demonstrated evidential strategy and proposed the origin of ergative system in Nilotic. The project built up the global network of Nilotic Linguistics and prepared the academic platform in Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2010年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2011年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
年度			
年度			
総計	11,300,000	3,390,000	14,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・歴史言語学

キーワード：ナイル諸語・形態統語論・共時言語学・通時言語学

## 1. 研究開始当初の背景

比較的単純な統語論をもつと考えられていたナイル諸語が、最近の研究によって通言語学的に珍しい文構造をもつことが明らかにされつつあった。しかしながら、国際的にまとまったナイル諸語の研究プロジェクトは存在しなかった。その原因は、ナイル諸語が話される地域が近年まで紛争地域であったことによる。そのために、現代言語学に基づいた記述研究のための現地調

査が行われなかったのである。

そこで現代言語学に基づく現地調査による共時的記述研究と比較研究による通時的研究を推進するために、継続的にナイル諸語を研究するスタッフを擁するアジア・アフリカ言語文化研究所を中心としたナイル諸語研究プロジェクトを立ち上げる必要があった。

## 2. 研究の目的

通言語学的に珍しいことがわかってきたナイル諸語の文構造を文献調査と現地調査を組み合わせることを目的とした。第1にナイル諸語の文構造を共時的に比較研究する。第2にナイル諸語がどうして珍しい文構造をもつことになったかを、ナイル諸語の文構造を通言語学的に比較研究する。これらの研究のために、国際研究者ネットワークを構築する。また、ネットワークに参加する研究者に資料を公開し、共有するためのプラットフォームを用意する。

### 3. 研究の方法

文献調査と現地調査を組み合わせる。文献調査は、研究者国際ネットワークを形成したうえで、アジア・アフリカ言語文化研究所内にナイル諸語研究のプラットフォームを構築し、国際研究者ネットワークに死蔵されている資料を研究プラットフォーム上で国際研究者ネットワークに公開し、ナイル諸語の比較研究を促進する。プラットフォームを用いて研究情報を共有する。

研究代表者(稗田乃)、研究協力者(ベアント・ハイネとクリスタ・ケーニヒ)、(河内一博)は、まだ十分に記述されていないナイル諸語に属する言語をえらんで現地調査をおこない、その資料を研究プラットフォームを用いて、比較研究を促進するために、国際研究者ネットワークに公開する。

研究者ネットワークに参加した研究者による国際会議を開催する。

### 4. 研究成果

研究の主な成果。

研究プラットフォームを用いて公開された文献は、ラブオル語、ルオー語、ベランダ・ボル語、クマム語、アチョリ語、チョピ語、(以上、西ナイル諸語)、マサイ語(東ナイル諸語)、サビニ語(南ナイル諸語)である。

形成した研究者国際ネットワークに参加した研究者のうち研究プラットフォームを用いて資料公開した研究者は、バーント・ハイネ(ケルン大学)、クリスタ・ケーニヒ(フランクフルト大学)、アナ・シュトーヒ、ベアトリクス・ハイキング、グリット・ディメンダール、(以上、ケルン大学)、ヘルガ・シュローダー(ナイロビ大学)、アンティエ・マイスナー(フランクフルト大学)、稗田乃(アジア・アフリカ言語文化研究所)、河内一博(防衛大学校)である。

資料公開をしていないけれど、研究者ネットワークに参加しているナイル諸語研究者は、ドイツ、イギリス、デンマーク、フィンランドに広がっている。

また、最終年度には本補助金による研究に参加した研究者による国際シンポジウムを日本で開催した。シンポジウムにはそのほかにも海外からの参加があった。参加者は、ドイツ、ケニア、日本から合計9名であった。

このシンポジウムは、本申請による研究の最終的な成果といえる。このシンポジウムにおい

て議論されたナイル諸語の通言語学的に珍しい言語現象でとくに興味深い研究は、以下のものであった。

グリット・ディメンダール(ケルン大学)は、ナイル諸語に見られる不規則的な形態音韻論の現象は、リズムによって説明できるというものである。ナイル諸語におけるリズムの研究は、研究代表者(稗田)によるクマム語のリズムの研究以外にはまだない。ディメンダールはナイル諸語全体を比較することにより、リズムの研究がナイル諸語の形態音韻論を書き換える可能性を示唆した。アフリカで話される言語の研究で言語理論の発展に貢献したものとして、声調の研究がある。リズムの研究は、声調の研究が見落としていた現象を解決する可能性をもつ。

研究協力者(クリスタ・ケーニヒ)は、ナイル諸語の一部の言語に「能格」が見られることを指摘した。さらに、ナイル諸語を比較することにより、「能格」があらわれる起源を明らかにした。西ナイル諸語の一部の言語に見られる「能格」の起源が受動化にあることを指摘した。この議論は研究代表者(稗田)がかつて主張した仮説であるが、それを詳細な比較研究で説得的に明らかにしたものである。研究代表者(稗田)は、さらに、「能格」の起源にはもう一つの可能性があることを討論のなかで指摘した。それは指示詞が「能格」を表示する形態素になった可能性である。

研究協力者(ベアント・ハイネ)は、ラブオル語の人称代名詞体系が他のナイル諸語のそれとは異なっていることを指摘し、さらにその起源を文法化の観点から説明した。西ナイル諸語に属する言語は、ときどき、その言語固有の、他の西ナイル諸語にはない人称代名詞をもつことがある。この研究は、その現象を体系的に説明する可能性がある。

研究代表者(稗田乃)は、アチョリ語の補文構造がエヴィデンシャリティによりことなる構造が用いられることを指摘した。ナイル諸語にエヴィデンシャリティを表現する手段が存在することを明らかにした初めての発見である。ナイル諸語もエヴィデンシャリティをもつことを明らかにしたことで、アフリカ大陸で話されている言語にもエヴィデンシャリティを研究する重要性を指摘した。エヴィデンシャリティを表示することがアフリカ大陸で話される言語にも存在することを明らかにしたことは、地球上で話される言語に普遍的にエヴィデンシャリティの表示法が存在することを証明する一歩になった。

研究協力者(河内一博)は、サビニ語の補文標識の起源を文法化の観点から明らかにした。補文標識が動詞 say から文法化により発展したことを、補文標識が現在、様々な意

味と機能を持つ理由であることを明らかにした。言語形態素が多義的意味をもつのは、文法化の過程における文法化の段階をしめすという普遍的な提案である。動詞 say から文法化により補文標識が発展することはよく知られた現象である。しかし、多義性を文法化で説明する試みは、ナイル諸語以外の言語にもあてはまる普遍的な議論である。

ベアトリクス・ハイキングは、ボル・ベランダ語の単文の文構造を明らかにした。文構造を統語論的ではなく、意味論的に構造を指定することがより説得的な説明を可能にすると指摘した。ボル・ベランダ語の文構造は、西ナイル諸語に共通する構造であることから、ボル・ベランダ語の文構造を明らかにすることは、西ナイル諸語の文構造を理解するうえで重要な手掛かりを与える。

これらのほかに、仲尾周一郎は、ナイル諸語とジュバ・アラビア語の言語接触について議論した。ジュバ・アラビア語には、西ナイル諸語のなかのアチョリ語からの影響があることを指摘した。その影響はたんに語彙的なものにとどまらず、文法的な影響があることを指摘した。その指摘は、ナイル諸語の文法の通時的発展を考えるうえで、ナイル諸語とナイル諸語以外の言語接触を考慮する必要があることを示唆している。

また、ウルリケ・ゾックは、アフラジアン諸語からの視点から、文構造の分析法を議論した。ナイル諸語研究の外からの視点は、ナイル諸語の文構造の研究に新たな刺激を与える。

ヘルガ・シュローダーは、東ナイル諸語の文構造についてその特異な点を指摘した。東ナイル諸語は、動詞を文頭におく語順をもっている。そのために特異な文法を発展させた。しかし、ナイル諸語の本来の語順は、文頭に動詞を置くものであったと考えられる。東ナイル諸語が現在しめしている形態統語論は、ナイル諸語が本来もっていたものの可能性が。西ナイル諸語が今、示している形態統語論は、通時的な発展の結果と考えられる。その過程を知るために、東ナイル諸語の形態統語論の研究は重要である。

これらの議論は、研究プラットフォームを用いて公開している。

アジア・アフリカ言語文化研究所に構築された研究プラットフォームを用いて公開した資料から、また、最終年度に開催されたシンポジウムの成果から、ナイル諸語に通言語学的に珍しい文構造が存在することがナイル諸語研究者が参加する国際研究者ネットワークにおいて広く認知された。研究プラットフォームを用いた公開からさまざまな珍しい言語現象がナイル諸語には存在することが明らかにされた。しかし、通言語学的になぜそれらの珍しい文構造をもつにいたったかは十分に解明できなかつた。これからの課題である。

研究代表者、研究協力者による現地調査は、

ラブオル語を研究協力者（ベアント・ハイネとクリスタ・ケーニヒ）がおこなった。

クマム語とアチョリ語を研究代表者（稗田）がおこなった。また、サビニ語を研究協力者（河内一博）がおこなった。現地調査により得られた資料は、研究プラットフォームを用いて公開した。

研究協力者（ベアント・ハイネとクリスタ・ケーニヒ）は、現地調査の成果としてラブオル語の文法書を *Studies in Nilotic Linguistics* の第1巻として出版した。これは、英文で書かれており、ラブオル語のまとまった記述研究としては、世界で初めての出版である。

研究代表者（稗田乃）は、現地調査の成果としてクマム語の語彙集を *Studies in Nilotic Studies* の第4巻として出版した。この語彙集は英文で書かれており、これには80頁をこえる文法記述が付記されている。語彙集の部分にも文法情報がゆたかに記述されている。たとえば、名詞の声調クラスや動詞の分類や派生である。研究代表者（稗田）による一連のクマム語研究の成果は、世界で初めてのものであるが、特に、このクマム語語彙集は、世界で初めてのまとまったクマム語の文法記述と語彙の研究書である。

アジア・アフリカ言語文化研究所に用意されたナイル諸語研究を公開し、共有するためのプラットフォームの具体的な成果として、ナイル諸語研究シリーズを本申請の成果として出版した。このシリーズは、第5巻まで公刊された。国外のナイル諸語研究を含むアフリカ諸語を研究する研究者、研究機関に配布された。

研究代表者（稗田）は、形態統語論の研究のほかに、現地調査の成果として、クマム語とアチョリ語の声調に関する研究成果を得た。クマム語とアチョリ語は、世界的にも珍しいダブル・ダウンステップ声調をもつ言語であることを発見した。この成果は、国際雑誌に掲載され、ナイル諸語研究者に評価された。ナイル諸語研究において、ナイル諸語に属する言語がダブル・ダウンステップ声調を持つか否かは、これ以降、常に確認する必要のある事項となった。また、この発見は、声調の研究に大きなインパクトを与えるものとなる。

また、研究協力者（河内）は、構築したナイル諸語研究のためのプラットフォームで成果を公表する以外に、ナイル諸語の認知論的研究成果をさまざまな国際学会で発表している。

[成果の国内外の位置づけとインパクト]

ナイル諸語研究のための国際研究者ネットワークを形成し、アジアアフリカ言語文化研究所内に研究プラットフォームを構築したことは国際的に高く評価された。ナイル諸語

研究の拠点がアジアアフリカ言語文化研究所であることが国際的に認知された。研究代表者(稗田)は、ケルン大学で開催された国際会議に招待された。フランクフルト大学にも招待されている。

今後の展望として、研究プラットフォームを拡張し、国際研究者ネットワークをさらに拡大することと、国内に後継を育てることである。

また、特筆すべき国内外のインパクトとして、研究協力者であるケーニヒ、クリスタがドイツにおいて、ナイル諸語研究のためのプロジェクトを立ち上げたことである。そのための資金をドイツ国内で獲得したことである。日本の科からスタートしたプロジェクトが国際的な広がりをもたせたことを意味する。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

①稗田乃「アチョリ語の補文構造」、フィールド調査、言語コーパス、言語情報学、査読無、4巻、2012、pp. 143-163.

②稗田乃「ダブルダウンステップ声調について、クマム語動詞形態論における声調の役割」、フィールド調査、言語コーパス、言語情報学、査読無、2巻、2010、pp. 1-21.

③Hieda Osamu 'Tonal System in Kumam, a Double Downstep Language,' Journal of Asian and African Studies, Vol. 80, 2010, pp. 5-25. 査読有

④稗田乃「クマム語の声調体系」、フィールド調査、言語コーパス、言語情報学、査読無、2009、pp. 19-43.

⑤稗田乃「歴史資料をもたない言語における歴史言語学」月刊言語、査読無、2009、pp. 18-25.

⑥稗田乃「クマム語の中動相」、アジア・アフリカの言語と言語学、査読有、2009、pp. 39-59. [学会発表] (計 4 件)

① Hieda, Osamu 'Complementation and evidential strategy in Acooli' International symposium 'Challenges in Nilotic Linguistics and More' 2011年12月4日、京都

② Hieda, Osamu 'Number in Nilotic', International symposium 'Number in Africa and Beyond' 2011年9月28日、ケルン大学

③稗田乃「クマム語の補文構造とエヴィデンシャルについて」2011年4月24日、日本ナイル・エチオピア学会、長崎大学

④稗田乃「アチョリ語の声調体系について」、2010年5月30日、日本アフリカ学会、近畿大学

[図書] (計 6 件)

①Hieda, Osamu (ed.) *Challenges in Nilotic Linguistic and More, Phonology, Morphology and Syntax*, (Studies in Nilotic Linguistics

Vol. 5) , Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 2012, 149pp.

②Hieda, Osamu *Kumam Vocabulary with Grammatical Notes*, (Studies in Nilotic Linguistics, Vol. 4), Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. 2011, 419pp.

③Hieda Osamu, Christa Koenig and Hiroshi Nakagawa (eds.) *Geographical Typology and Linguistic Areas*. John Benjamins, 2011, 320pp.

④Hieda Osamu (ed.) *Descriptive Studies of Nilotic Languages*. (Studies in Nilotic Linguistics, Vol.3), Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 2011, 107pp.

⑤Hieda, Osamu (ed.) *Descriptive Studies of Nilotic Morphosyntax*. (Studies in Nilotic Linguistics, Vol. 2), Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 2010. 146pp.

⑥Heine Bernd and Christa Koenig *The Labwor Languages of Northeastern Uganda, A Grammatical Sketch*. (Hieda Osamu (ed.) Studies in Nilotic Linguistics, vol. 1), Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 2010. 107pp.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

稗田 乃 (HIEDA OSAMU)

東京外国語大学・アジアアフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：90181057

##### (2) 研究協力者

ハイネ、ベアント (Heine, Bernd)

ケルン大学・アフリカ研究所・教授

ケーニヒ、クリスタ (Koenig, Christa)

フランクフルト大学・研究員

河内一博 (KAWACHI KAZUHIRO)

防衛大学校・准教授